（地名はその支部）

ラヂオ・テレビで琵琶放送

○：二月二十八日㈭午後三時十分NHK・FM。壇の浦ー青山旭子▼秋風故郷の山ー平田旭輝・絃中村旭園。

○：二月二十九日㈮夜七時半NHK教育テレビ、邦楽まわり舞台筑前博多の調べ。筑前琵琶那須与市ー中村旭園▼滑稽琵琶餅酒合戦ー吉塚元三郎▼地唄楫枕、琴尺八伴奏。

訃報

伊藤碧水氏（本名太蔵氏）　一月二十四日脳軟化症のため逝去、享年七十四才。昭和八年松田静水師の門に入り同十年久下光水師の指導を受け、同二十八年安田希山氏と共に「武絃会」を結成、同年皆伝、三十四年総伝を一水会本部より允許。一水会多摩支部長及び武絃会を総括して琵琶楽の振興発展につくされた功労者で伊豆の御難、恩響の彼方、茨木などの曲を好まれた温厚の君子であった。謹んで弔意を表し御冥福を祈る。（小金井市本町一の八の五）

峰口高昇氏（本名岡崎嘉一氏ー京都琵琶協会々員）三月二日老衰のため急逝、享年八十七才。十九才の春児玉天南師の門を叩き又横山皐正師に師事し後桃木耳水師に歌の指導を受く。大正十二年京都山科十禅寺に於いて泉勝院の院号を授かり高昇流宗家となり琵琶界に活躍。武石浩波、屋島の誉などを好んだ外長唄、小唄をよくされた。四日送葬、告別式には多数の琵琶人が参列して永別を惜しんだ。謹んで哀悼の誠を捧げ御冥福を祈る。（京都市中京区丸太町高倉下ル阪本町）。

予告

○：筑前琵琶温習会　四月六日㈰正午京都東山安井金比羅宮会館、主催梅原旭濤会、後援京都琵琶協会。

○：琵琶奉納演奏会　四月二十日㈰昼一時京都山科醍醐寺松登、大阪琵琶同好会協賛。

○：京都琵琶協会四月例会　四月二十九日㈭昼一時会員梅原旭濤女史宅、筍賞味会。（阪急電車西向日町下車、電話（〇七五）九三一ー一六九一番）

○：各流派琵琶名流演奏会　五月五日㈭十時ー十七時神戸市県庁横兵庫県民会館、主催日本琵琶楽協会関西支部。（有料）

○：各流派琵琶合同演奏会　五月二十五日㈰十一時ー十七時京都烏丸御池京都商工会議所ホール。京都琵琶協会・一水会京都支部・四明会共催。

（訂正）京絃二月号七ページ上段十八行目（二）頂に記載の〝重衡〟は誤植でした。取り消します。

あとがき

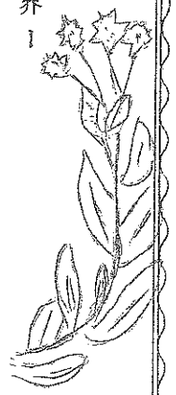
春らんまんの四月、桜花咲き乱れて何となく心の浮き立ちそめるのを覚える●季節はづれの十二月が過ぎ今年も暖冬かと喜んで居たが、一月半ばからの厳しい寒冷には辟易した●山陰北陸から東北北海道など二米も三米も積もったという近年稀な大雪も四月の声を聞けば好むと好まざるとに拘らず春がやって来る●琵琶界もこれからしばらくの間活気を呈しよう、喜こばしいことである●それにしても玆二、三ケ月の間に有名琵琶人数氏の訃に接したことは誠に淋しい限り●自然陶汰の原則で生あれば必ず死ありとは云え八十才前後の仲間たちが次ぎから次ぎへと亡くなられ悲しみと情なさで一掬の涙を禁じ得ない●愛読者の皆さま、どうかこの上とも充分御自愛下さって京絃紙の「訃報欄」を無用の長物にして貰いたいと心から念じたい。

昭和五十五年四月一日発行（非売品）
編集者　植村寞水
発行所　京絃社
〒569　高槻市津之江北町一一ノ二三
電話　〇七二六（七三）六〇五一番

琵琶機関紙　京絃　第三一〇号　京絃社

琵琶（一八）

ー忘れられんとする音の世界ー



村山道宣

筑前琵琶（下）

琵琶の最盛期

東京中央放送局（NHKの前身）が、大正の終りに嗜好調査をした結果では、洋楽、邦楽を含めあらゆる音楽の中、最も人気があり放送希望の多かったのは、何と「琵琶」であった。次に参考までに順を追って列挙してみる。琵琶、歌絃楽、長唄、義太夫…説教節、室内楽、謡曲、ジャズ。この調査結果を見ただけでも当時の人々に琵琶がどんなに親しまれていたか良く解るであろう。

また、博多で「琵琶界」という琵琶専門雑紙を発行していた古野茂氏の調査に依れば、教授で生計を立てている琵琶教師の数を全国で何と約六千名と推定している。このようなことから考えて、その最盛期には一般の琵琶愛好家の数は恐らく数十万を数えたであろうと思われる。

東京で琵琶制作の店を営む石田琵琶店主の話に依れば、琵琶全盛時代には東京とその周辺だけでも七十軒もの琵琶を制作する店があったそうである。また銭湯に入浴中、琵琶の一段を始めから終りまでひとしきり唸り語り終ってから、意気揚々と手拭を肩に引き揚げる若者や、そば屋の出前のお兄さんが自転車に乗り、そばを片手に琵琶歌を歌いながら走って行く様なども良く見られたそうである。その当時は「琵琶が出来なければ女性にもて ない」という位、琵琶人と云うものが粋な恰好良い存在であったものらしい。

さらに、海外の邦人にも琵琶は愛好された。当時、日本の勢力圏であった朝鮮、満州、台湾の各地域にたちまちの中に琵琶は広がって行ったのである。九州や中国地方に端を発する薩摩琵琶や筑前琵琶は、東京を起点にナショナリズム、ミリタリズムの昂揚の中、全国に普く広まったのであった。

しかし、このような琵琶の盛期は長続きせず、昭和も十年代に入ると急速に衰微して行った。この原因としては色々なことが考えられるが、その最も大きなものは、人々の音楽に対する嗜好の変化であろう。人々の興味は洋楽、ポピュラー音楽、流行歌、映画などへと次第に移って行ったのである。こうして、洋楽、その他の輸入音楽や流行歌を中心とする大衆歌謡が、人々に好まれる音楽の主要なものとなり、琵琶は少数の愛好家が細々と伝えるものとなった。

琵琶はその制作者の数もわずか数人になって来ている。勇壮で、時折り寂とした無常感を漂わせる薩摩琵琶の冴え渡った、厳しい音の世界、筑前四絃琵琶の奔放で艶やかなくづれ琵琶の音の世界、これらの音の世界は現代の安易で享楽的な消費文化の波の中で益々孤立して行くように見える。琵琶はこれから何処へ行こうとしているのであろうか。

おわりに

我国に於ける琵琶文化の裾野の広がりは大変なものであった。特に盲僧や肥後琵琶師の人々の活動は幅広く、多岐に渡っており、その琵琶の内容は非常に豊富なものであった。

ところが戦後の急激な社会生活の変化は、それらの琵琶の存立基盤をも失わしめて行った。薩摩琵琶や筑前琵琶が人々の記憶から次第に遠ざかって行ったように、盲僧琵琶や肥後琵琶もまた、忘れられようとしている。

しかし、少くとも現在、私の体内には二十年前に、交通事故で亡くなられた、あの北田明澄氏や太田さん、多田のおばあちゃん、山鹿さん、その他多くの私が旅先で出逢った人達の豊かな音楽世界が、生き生きと、したたかに脈打っている。私には今、一筋の光明が見える。遠く西方浄土より流れ出す、霊妙なる「楽の音」が朝の潮騒のように、すがすがしく、力強く聞こえてくるようだ。

おんなぼきゃ、べいろしゃのうまかぼだら、まにほんどま、じんばら、はらばりたや、うん。

（十八回（一年半）にわたり連載の本書は今月号を以て完結いたしました。御執筆者に感謝の意を表し併せて御愛読下った各位に御礼申し上げます。　1係1）

五絃閑話（六）

水藤五郎

理解と批評

二月十七日の昼、筑前琵琶原島旭粧演奏会に祝意参上した。寒さの厳しい時季でありながら、その日が早春にふさわしい快晴のあたたかさであった事は、主催者の旭粧師はもとより客席に在る我々に取っても幸運であった。

私を含めて、多くの琵琶人が演奏会に出かけるのは、自分がその会に出演する時は別として、そうでなければ、祝意を込めて会場を訪問する場合がほとんどである。琵琶人同志の〝付き合い〟と云うこの習慣は、或る意味では、少数乍らも琵琶界なる社会を作り出し、一つの交流関係を生み出した。だがその反面その〝付き合い〟に依存するあまり、新しい客層の開拓への努力を怠たる原因を生み出してしまった事も見逃せない事実ではないかと思う。

〝付き合い〟が芸界にとって、その社会に遊ぶ人々にとって大切な事ではあるが、その為に、客席に在る人々が固定化してしまい、加えて、プログラムの内容にまで、必要以上の〝お附き合い〟が現われるとしたならば、新しい琵琶人口の増加は望めないと思う。

毎々話題にする如く、琵琶の会の開催に於いて最も考慮すべきことは、その会が、主催者のどのような意図によって開かれるのかを明確に知らせることであろう。特に、個人主催の場合にそれが云えると思う。

主催者が、自分の芸術発表のために企画した会であるとか、又は、主催者一門の発表会であるとか、それなりの目的を示して、多くの聴衆を呼び求めるべきである。

今日迄の琵琶会の多くは、主催者とその一門による温習会や、数人で結成された協力会が大半であったが、その内容とは反対に、その会が、その主催者の芸術発表の会であって、演奏の総てが良いもの云々…とプログラムの挨拶に明記されることが多々であった。

この一文を信じて訪れた人は、未熟な門人達が次ぎから次ぎへと登場する迷演奏に失望し、又怒って、〝なあんだ琵琶はつまらない!!〟と思って、主催者の芸は良いとは判っていながら、その会の内容と、プログラムの在り方に憤慨を抱いて帰ってしまうと云うことが続いてきた。総てではない乍ら、この様に考える限り多くの琵琶会が、聴衆に対して嘘をついてきたことになる。

琵琶会の不振の原因が、演奏者の拙演に依ることであるのは当然としても、それ以上に大きな原因は、この看板の偽りなのである。

〝今日の会が温習会で、出演者は下手であって、本当に聴き苦しい事でしょうが、私共は一生懸命に演じますから、どうか理解して下さい〟と表記しての会であるならば、たとえそれが調子外れの迷演揃いであったとしても聴衆は、芸に遊ぶ一途な態度に理解を抱く事は間違いない。

琵琶会の舞台では、当然の事のように紋付袴の演奏姿に接するが、他芸に於いては、紋付きの演奏は玄人、則ち専門家の姿であって自然と上手であることが要求されているし、失敗も許されない。この意味で、聴衆は素人の芸とは異なるものとして捉えている。それゆえ、理解を越えた批評の眼を向けることになるのであって、〝紋付き〟で登場する以上その聴衆の目を覚悟しなければならないと考えられている。

琵琶会に於ける、〝紋付き〟は多少異なっていて、初伝・中伝等の雅号をとれば、もう一人前と許り紋付き着用となるのである。そんな事とは知らない聴衆は、〝紋付き〟を着て登場する演者に対し、他の芸能界に於ける芸術と同様なものを要求するため、新たな批評を生むことになる。琵琶会の舞台作りで、今後の課題は、拙い演奏であるか否かの判断を自覚して、もし拙い演奏と思うのであれば、その事を明確に示して、聴衆に理解してもらうことであろう。又、自己を〝紋付き〟に包む者は聴衆の批評を覚悟し、それを進んで汲み取る努力をすべきだと思う。

こうした観点で訪れた原島旭粧師の会が、その思いを一層深めるものとなった事は、琵琶界に於ける旭粧師の立場が、今日、名実共に第一人者の一角であるだけに残念であった。

旭粧師の流麗で且つ鮮麗な歌声と絃音に心酔する人は多い。当然乍ら私もその聴衆の一人であり、その演奏を範と仰ぐ者でもある。而し乍ら、今回のプログラムの挨拶に、旭粧師が、邦楽振興のためからこの会を開催するとあるのを読んで、これは琵琶振興のためと解せる以上、何故、旭粧師の独演会、若しくは、それに近い形式でなされなかったのかと悔やんだのである。現在の師を知る者にとって、決して師は若くはない。老境に在ると云うのが事実であろう、その意味で、師の存在は、関西の山崎旭萃師と共に貴重である。さすれば、師の演奏会であれば、新しい人々にその至芸を知ってもらいたいと願う。だが、現実に、この日の演奏会では肝腎の旭粧師の演奏を堪能することは難かしかった。

旭粧師の独演会でもなく、一門の温習会でもなかったこの日は、客席の賑いとは反対に多くの来聴者に、旭粧至芸を堪能し得なかった不満を残したのであった。（この項続く）

九郎判官義経（五）

ばくすい

その後、両軍入り乱れて戦ううち、義経は弓を取り落とし、弓は波の上を漂うた。義経はこれを拾わんとする。平家は船の上より熊手を以て義経の兜に掛けて引こうとする。義経はそれを払い拡い、遂に弓を拾い笑いながら帰って来た。人々は「いかに大切な弓であろうとも命懸けで拾うには及びますまいに」と批判したが、義経は「弓が惜しいのではない、叔父の為朝ほどの強弓ならば敵に渡してもよいが、義経のは小さく弱くて、源氏の大将の弓はこのような弓かと嘲弄されるのが残念と思ったのみ」と答えたので、一同感銘した。

屋島の平家を、義経軍は二月十八日に陥落させた。摂津の渡辺に残っていた梶原以下の勢が、二百余艘の船をつらねて屋島に着いたのは二十二日、戦い済んで四日目であった。

義経は四国に在り、そして範頼は大軍をひきいて九州に入っている時、その間隙を窺って平家は長門の壇の浦に集結した、範頼は例によって行動緩慢で、壇の浦の攻撃は義経が担当しなければならぬ。三月二十四日卯の刻（午前六時）戦闘開始、梶原が先陣を希望したが、義経が先陣は自分であると云って梶原の申し出を退けたため、二人の仲が悪くなった。梶原は之を深く根にもって、頼朝に讒言するようになったと云われる。

壇の浦は潮流の激しい所で、平家は元来船いくさを得意とし、しかも長門の国は平知盛の知行国であるので、地理も詳しく船も整っていた。〝坂東武者は馬の上でこそ口はきき候とも、船いくさには何時調練し候べき、魚の木に登ったるにこそ候はんずれ〟（平家物語）と源氏を軽く見ていたが、源氏は大将軍義経を先頭に、勇敢且つ巧妙に戦を進めた。平家は知盛の指揮でよく戦ったが、敗北ときまるや知盛は鎧を二領重ねて着用し、海底に沈んで自決した。強勇能登守教経は義経に迫らんとしたが、義経は身が軽くてヒラリ、ヒラリと船から船へ飛び移るので追いつけず、三十人力を誇る敵二人を両脇に挾みつけたまま入水、資盛・有盛・行盛の三人は手に手をとって沈む。

これを見て清盛の夫人二位局は「波の底に

も都の候ぞ」と、安徳幼帝を抱き参らせ海に入る。御母建礼門院徳子も入水したが、源氏の兵が熊手で引上げて助けた。三種の神器は神剣以外は無事に守ることが出来た。

捕虜は男子三十八人、婦人四十三人。前内大臣宗盛、その子右衛門督清宗、その弟六歳の副将丸、大納言時忠と実子中将時実などがその主たるものであった。また有名な侍大将で行衛不明となったのは、越中次郎兵衛盛嗣、上総五郎兵衛忠光、悪七兵衛景清等であった。

壇の浦合戦は三月二十四日卯の刻（午前六時）に始まり、正午には勝負がきまった。源氏八百四十艘、平家五百余艘と記録に残っている。四月二十六日義経は宗盛以下の捕虜を護送して京都へ帰って後始末をし、六月七日宗盛父子を連れて鎌倉に向った。これは平家の中心人物だから頼朝に指揮を仰ぐためであった。東海道を下って明日は鎌倉に入る所まで来ると、頼朝の使者北條時政が現れ、義経は鎌倉に入るべからずと、宗盛父子を受取り、腰越附近に滞在して命令を待てという。

義仲を討ち平家を亡ぼして稀代の戦功をたてた義経は、兄頼朝より感謝と賞讃の言葉を期待していたのに案に相違して、五月十五日から六月四日まで腰越で頼朝からの便りを待った。

義経は五月二十三日、手紙を大江広元に贈って仲介を頼んだ。これは腰越状という名で後々まで伝わり人々は感動した。漢文調で書いてあるが、假名交りに書き直すと

左衛門少尉源義経、恐れながら申上げ候意趣は、御代官のその一に撰ばれ、勅宣の御使として朝敵を傾け累代弓箭の芸をあらわし、会稽の恥辱をすすぐ、抽賞せらるべきの処、思いの外に虎口の讒言によりて莫大の勲功を黙止せらる。義経犯すこと無くして咎を蒙り、功ありて誤無しといえども、御勘気を蒙るの間むなしく紅涙に沈む。つらつら事の意を案ずるに、良薬は口に苦く忠言は耳にさからうとは先言なり。讒者の実否を糺されず鎌倉中に入れられざるの間、素意を述ぶる能わず徒らに数日を送る。此の時に当りて永く恩顔を拝し奉らず、骨肉同胞の義既に空しきに似たり。宿運の極まる処か、はたまた先世の業恩を感ずるか。悲しいかな此の條故忘父の尊霊再誕し給わずんば、誰人か愚意の悲歎を申し披かん。

（以下略ー吾妻鏡）

義経は自分の心持ちを披露し、野心のないことを細々誓って起請文に血判を押し提出すること教度に及んだが兄頼朝は諒解せず、六月九日義経は宗盛父子を受取り、腰越から京都へ引返すのやむなきに至った。そして頼朝は義経に命じて近江の国で両人を斬らせた。時に宗盛三十九才、清宗は十五才であった。

茨木童子姿見の橋

辻　旭　城

阪急電車茨木市駅の西南、茨木市新庄町の安藤家の裏に〝茨木童子姿見橋〟の碑が建てられており、琶琵歌にも茨木、羅生門などの曲もあるので、参考のため取材に向った。安藤家の前が枝切街道で、細い石路川に石橋が架かっているのが首題の橋で、橋の北詰東側に理髪店がある。そこが童子を育てた床屋の跡だといわれている。また東南の九頭神という場所に、童子の櫛塚があった。

「摂陽群談」によると、茨木童子の出生地は大阪府川辺郡東富松村（現在の尼崎市東富松）で、生まれながらにしてキバの生えた恐ろしい鬼の顔で、一族たちは恐れをなし島上郡茨木村のあたりに捨てた。その地名をとって〝茨木童子〟と名づけた、とあり、後に京の羅生門で渡辺の綱の兜を摑み、腕を斬り落とされた鬼というのは、この茨木童子のことだと云われる。

源頼光が大江山の鬼を退治してから、四天王の藤井貞光、卜部季武、坂田公時、渡辺綱らが洛西嵐山に集って、春雨のつれづれに酒宴を催したとき、平井保昌が「九条の羅生門

に夜な夜な鬼があらわれるので、日が暮れると人の往来もないらしい」と云い出した。

これを聞いていた渡辺綱は「畏れ多くも御所の近くに鬼が棲むなど、単なる噂であろう」ー棲んでいる、棲んでいないー両者は口論となり、その結果綱が今夜羅生門に出向き、真偽を確かめるため頼光に魔除けの札を乞い只一騎で馳せつけた。

物凄まじく雨落ちて、俄かに吹きくる風の音に、駒も進まず……綱のうしろより兜のしころ摑みて引留めれば、すわや鬼神の出現と、太刀抜き払い斬らんとするに、鬼の背丈けは六尺以上、両眼は日月の如く輝やき綱を睨んで立ったりけり。このとき鬼神は、片手に持ったる大鉄杖を振り上げ打ちかかる。綱は飛びちがい太刀抜き放ち斬りかかる。斬られて組みつかんとするを、払う剣で腕を斬り落とされ、ひるむと見えしが脇築土に登り虚空をさして上がりけるを、慕い行けども黒雲おおい、ついに鬼神を見うしないけり。（改訂平家物語の一節）

あちこちの民家を訪ねて茨木童子の伝説について聞いてみたが解らないという返事で、取材をあきらめて帰ろうと、最後の一軒に望みをかけ鄙びた家を訪づれると、幸いに古老が居て話を聞くことが出来た。

摂津の国島本郡穂積郷の新庄に一軒の髪結い床があった。ここの夫婦は客に親切で愛嬌者だったから店は繁盛していたが、只一つの悩みは夫婦の間に子供が出来ない事で、毎月一日と十五日には附近の観音様に子供を授けて下さるようにとお詣りをしていた。

或る夜、一日の忙がしかった仕事を終えて床についたが、間もなく表で赤ん坊の激しい泣き声が聞こえた。不思議に思って出てみると、軒先に赤ん坊が棄てられている。これは日頃信仰する観音様からのお授りものと、喜んで泣く子を抱き家に入ってその子の顔を見た途端、驚きのあまり腰を抜かした。

それもその筈、赤ん坊は口の両端にキバを生やし、眼がランランと光った恐ろしい顔の鬼子だった。

しかし、情け深い夫婦はその赤ん坊を大切に育てた。その子はよその子供よりも大きく怪力の持ち主だったが心は優しく、やがて十五・六才頃から夫婦に教えられ、剃刀で客の顔をそるようになった。

そして或る日、童子の剃刀が滑って客の顔を切った。童子は流れ出た血を指先で拭い取って口にしたが、その血の味は何とも絶妙な美味であったので、それ以来童子は意識して客の顔に剃刀で疵をつけ、その血をなめるという噂が立ちはじめた。

そこで夫婦は打捨てておくわけにも行かず、実はお前は家の前に棄てられていた鬼子だと打ちあけ、表の石橋の上から水面にその姿をうつさせた。

始めて水面にうつる自分の恐ろしい顔ーそして自分の生い立ちを知らされた童子は思い悩んだ末、親身も及ばぬ優しく育てて呉れた床屋の夫婦に、これ以上迷惑をかけるのは済まぬと遂にそのまま家を出て諸国放浪の末、丹波大江山の酒呑童子の子分になったという。

「都大路の夜は更けて、あたり静けき丑満の、鐘の音さえ凄々と、陰に篭ろう響あり、さる程に渡辺源次綱は、都の九条羅生門にて、鬼神の腕を斬りとりて、武名を天下にあげけるが、去りながらかかる悪鬼は、必ず仇をなすなりと……。」

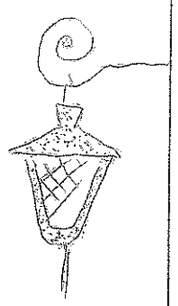
源頼光の四天王の一人渡辺源次綱は、京都羅生門で鬼神の腕を斬り取ったが、阿部清明の進言で七日間自宅の門を閉じ、仁王経を読誦して七日目の物忌み明けの夜伯母が訪ね来て、鬼の腕を見せて呉れという。やむなく唐びつに納めた腕を差出すと、伯母の姿は変じて悪鬼となり、黒雲を起こしてこの腕を取り天空に退散するという筋書きである。

〔本文は五十二年九月号（二七九号）に掲載の〝茨木童子〟と重複の感がありますが筆者も内容も多少異なりますので敢えて掲載しました。　ー係ー〕

言寸（43）

浦島太郎

「日本書記」に、〝雄略天皇の時、水江浦島が亀にひかれて海神の都に渡り…〟とあるが、その丹後水江の地が今の京都府与謝伊根町筒川で、その宇良神社に太郎が祭られている。行先の〝竜宮〟とは朝鮮のことか？



「琵琶は造字である」と

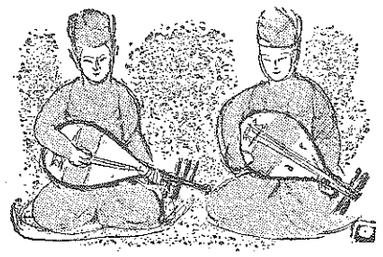
ゆく春や重たき琵琶の抱き心　蕪村

天明五年刊（一七八五年）「五車反古」にある句で、琵琶を抱くのは勿論蕪村ではない。けだるげに琵琶を横抱きにする王朝貴人の妖艶なおもかげであろう。

陳舜臣氏が先日朝日新聞、「西域余聞」の中に琵琶楽について述べられた。それによれば「琵琶は中国にとっては外来のものであった。四絃はイラン系のもので五絃はインド系であるという。中国でも四絃が主流であり、伝わった時機も五絃よりずっと古かった。明治になってから錦琵琶や筑前琵琶の一種に五のものが出現したが、これは盛唐五絃琵琶の復活ではなく、新しい考案とみなすべきであろう。

次いで枇杷という字はいまでは果樹の名称となっているが、果物よりも楽器の方が先であった。その果実が琵琶の形に似ているから名づけられたという。よく見ると果実も葉も琵琶の形に似ているからという。

木へんのビワが植物名となったので、もっぱら楽器名には「琵琶」が用いられるようになった。琵琶は造字であったと云えよう。」と。



え・九山　石根

琵琶語源ー　古代イランBARBAT（ペルシャ）
現代中国PIPA（国音）

（付記）　千字文に「枇杷晩翠」の一句がある。ある千字文訳解の中に「枇杷はさまで見どころなけれども晩とて年のくれの冬になれば翠色をかえず、いつまでもみどりに」。とある。私はこの句がやはり好きです。　（五五・三・一ー鴨水）

故伊藤磐水師を偲ぶ

坂本錦道

伊藤磐水師が突如入院の報を聞いたのは昨年の秋と思う。早速見舞にと青梅のリハビリテーション病院の所在を聞きに小金井のお宅へ参上した。夫人のお話によれば、多年に亘る糖尿病より脳軟化症を併発し意識不明のままというので、同師の意識回復するのを待つことにした。尚夫人の話では、糖尿病のインシュリンの注射は薬剤の知識のある本人が、自身の手で多年に亘り両腕から両股にかけて最早や打つ所もなく、再起は全く不可能であるとのこと、私も一入心配の度を深めたが、一月二十四日遂に薬石も効なく他界された。

想えば終戦直後中央線に在住する弾奏者相寄り武絃会を創立した。主なる顔触れは畑秀水、高杉洲靖、安田希山、土田昇龍、錦道以下二十数名で、世話人は伊藤師が一切をとりしきり、脈々と会を重ねること百五十数回に及んだ。この種会歴としては断然トップに立つ記録であろう。しかも三十何年間に亘り黙々として世話役を一手に引受けて来られた磐水師の努力には、深く頭の下がる思いである。

散りゆく梅花と共に七十四年の生涯を閉ぢられた磐水師のため、一掬の涙をもって切にご冥福を祈るものである。

日本芸術琵琶普絃会二月例会

二月十七日(日)午後一時東京文京区大塚六丁目貸席京屋二階で開催、定刻山崎錦幽によるお江戸日本橋・門琵琶の連弾を序奏に本能寺ー内田隆章▼伏見の吹雪ー金森旭弾▼俊寛(上)ー坂入晴峰▼西郷隆盛ー青木早水▼黒田武士ー錦幽▼小栗栖ー高田栄水▼吹雪の敵ー日比錦鮫▼堅田落ー若宮旭登▼八甲田山ー杉山旗水▼蜘蛛の糸ー鈴木流泉。以上研修を終り小宴、六時半散会した。

梅花祭に琵琶献奏

二月二十四、五の両日大阪藤井寺市道明寺天満宮梅花祭に大阪琵琶同好会が協賛献奏。西郷隆盛ー矢野旭信▼湖水渡ー多和綾子▼井伊大老ー辻旭城▼青の洞門ー石橋旭嶺▼青葉の笛ー作花旭友▼竜の口ー田中歌水▼鶴ケ岡ー天津八千代▼禅師と正宗ー中島旭穂。外に詩吟、剣舞、浪曲、奇術など数番。

京都琵琶協会三月例会

三月九日(日)昼一時、本部平井会長宅、馬場鴨水、林旭朔、田中歌水、梅原旭濤、山岡旭清、安住旭康、牧南水、荒木旭媛、桜井旭冨、水内嬢水、平井春嶺の各会員出席、数氏研修演奏のあと来たる五月二十五日開催予定演奏会の出演順抽籤とプログラム作成、四月六日の旭濤会温習会の準備手伝いなどをしたあと夕食を共にしながら芸談に花を咲かせて七時などやかに散会した。

筑前びわのしらべ

三月十五日(土)午前十時山崎旭萃会演奏会が大阪北御堂大阪津村別院で開催された。今回は特に全国各地の門人たちが日頃修練の得意曲を披露した（有料）。終演午後七時。

菅廟の月ー山口▼明石の浦ー秋田、北尾▼川中島ー田端▼茶臼山ー宇田・絃旭蘭▼稗搗の歌ー佐伯▼常陸丸ー岡田▼本能寺ー五人・絃旭城▼衣川ー細川、斉藤▼茶臼山ー四人・絃旭城▼小栗栖ー横山旭宝▼川中島ー大原・絃旭蘭▼本能寺ー伊藤・絃旭蘭▼井伊大老ー西村旭富▼青の洞門ー新田▼竜の口ー勝田旭志▼井伊大老ー野田旭敵▼鉢の木ー角田旭優、谷口旭芙・絃旭香▼禅師と正宗ー安住旭康▼西郷隆盛ー竹田旭竜▼青葉の笛ー坪内旭鳳▼曲垣平九郎ー木村旭桂▼大楠公ー渡島旭鶯▼千代の寿ー島田旭千、吉田旭晶・絃旭萃、旭蘭、旭典、旭勝、旭美津、旭瑛、旭城、旭香・大絃旭清・立方三、箏二、尺八二▼挨拶ー会長山崎旭萃、後援会長久徳正彦▼那須与市ー片山旭星▼曽我兄弟ー菅旭耀▼地震加藤ー横井旭寿、西村旭瑞、三宅旭陵・絃旭瑛▼木村重成ー上畑▼小栗栖ー堀川旭鵬、樋口旭秀▼伽羅の兜ー長栄旭桜▼鶴ケ岡ー奥村旭翠▼舟弁慶ー島田旭紅▼森蘭丸ー大石・絃旭蘭▼大楠公ー柏木▼井伊大老ー水野旭麗▼神崎与五郎ー東▼源実朝ー内藤旭波▼大楠公ー大原▼大楠公ー桜井旭冨、一坊寺旭清▼木村重成ー長尾▼西郷隆盛ー林旭竜▼小栗栖ー山下旭瑞▼隅田川ー大迫旭山▼粟津の露ー久徳旭蘭▼壇の浦秘曲ー板谷旭邑▼羽衣ー佐伯旭瑛、林田旭城、田子旭園・絃山崎旭萃、板谷旭邑、久徳旭蘭、矢吹旭美津、菅旭香・箏二、尺八二。

錦心流琵琶演奏会

三月二十二日(土)午後五時半東京上野本牧亭一水会本部青少年開発部主催（有料）。月下の陣ー平塚森正美▼城山ー横浜樋泉舟水▼巌流島ー横須賀大坪碧水▼本能寺ー江北、阿久津秀水・絃彩水▼屋島の誉ー杉並木村東水▼五條橋ー酒田山本笙水▼舟弁慶ー横浜森中志水▼湖水乗切ー逗葉佐藤恋水▼小栗栖ー横浜田中井琇水▼母常盤ー酒田渕上桜水▼花吹雪ー横浜荒井姿水▼吹雪の敵ー横浜板倉穣水。